

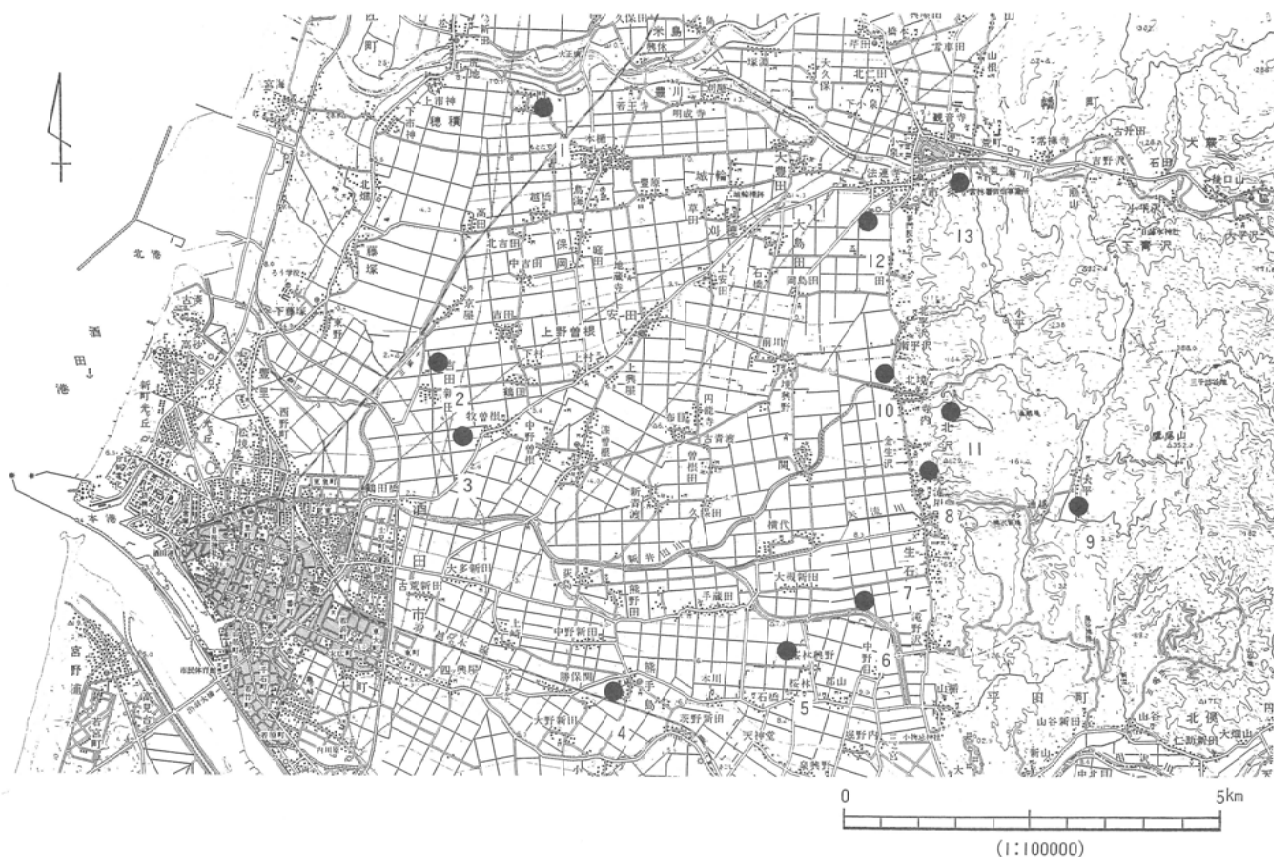
(5) 庄内平野・砂丘の縄文～弥生時代遺跡 (第121図)

中谷地遺跡や梵天塚遺跡から縄文土器・弥生土器が出土したことで、庄内平野部での、遺跡立地の在り方をとらえ直す必要を感じる。庄内では、これまでに平地や砂丘でも少ないながら縄文・弥生時代遺跡の発見があった。これら周知の遺跡を検討し、生活領域や地形などについて考える。

大正10年、酒田市黒森地区で赤川の改修工事に際して、砂丘下から縄文時代晩期～弥生時代の土器が出土した。郷土史家阿部 正の「山形県黒森砂丘下の遺跡」(1942『考古学雑誌32—10』、日本考古学会)の報告によれば、遺物は「河底に近い所、すなわち砂と泥土を混じた少々黒い層」の中に発見された。おそらくは泥炭層と思われる。また、樹木根や倒木の存在は、砂丘はまだ発達しないで、樹木は覆われていたことを示す。採集された遺物は、財致道博物館と酒田市立光丘図書館に保管されている。

遊佐町藤崎山および青塚付近から石鏃が出土している。佐藤禎宏(1976「遊佐町神失道遺跡について」『庄内考古学13』)により、資料の由来や位置について紹介されている。佐藤によれば古代『三代実録』に残る石鏃飛来地は、神矢道遺跡の可能性が高いと推定された。

藤崎周辺では、近世に入り砂丘植林に携わった佐藤藤蔵なるものが石鏃を皇室に献上した古文書が佐藤家に残されている。



表—35 酒田周辺の縄文・弥生時代遺跡一覧

遺跡名	位置	標高	出土遺物	文献
1 向田遺跡	酒田市本楯字向田	8.4m	縄文弥生土器	山形県縄文センター第34集
2 中谷地遺跡	酒田市吉田新田字中谷地	3.2m	弥生土器	山形県縄文センター第42集
3 梵天塚遺跡	酒田市牧曾根字梵天塚	3.2m	弥生土器	山形県縄文センター第42集
4 熊手島遺跡	酒田市熊手島	6.3m	縄文土器 晩期A'式	山形県教育委員会 第171集
5 西田遺跡	平田町松林字西田	7.2m	弥生土器 棚倉式	山形県教育委員会 第126集
6 生石4遺跡	酒田市生石	8.6m	弥生土器	山形県教育委員会 第118集
7 生石2遺跡	酒田市生石	12m	弥生土器 砂沢式	山形県教育委員会 第171集

第121図 縄文・弥生時代遺跡分布図

遺跡名	位置	標高	出土遺物	文献
8 北沢遺跡	酒田市北沢	50m	縄文土器 石器	1975山形県遺跡地図
9 生石3遺跡	酒田市生石字林新田	104m	縄文土器 石器	1975山形県遺跡地図
10 北境遺跡	酒田市北境	12m	縄文土器	1975山形県遺跡地図
11 入ノ沢遺跡	酒田市北沢字入沢	50m	縄文土器	1975山形県遺跡地図
12 樋掛遺跡	八幡町一条字北境	12.4m	縄文土器 後期	山形県教育委員会 第52集
13 八森遺跡	八幡町一条字八森	65m	縄文土器 前期	山形県教育委員会 第54集

昭和49年(1974)、当時致道博物館次長酒井忠一氏は、埋蔵文化財分布調査中に鶴岡市大字三瀬字宮の前で、弥生時代(天王山式)の土器を採集した。

昭和50年(1975)、庄内砂丘の地質を研究されている角田清美氏は鶴岡市七窪で砂丘の断面調査中に土器片を発見した。発見の知らせを受けた酒井忠一氏と佐々木七郎氏は現地調査を行い、第2黒砂層とされる層準に相当することを確認した。

昭和50年代に入り、庄内では、ほ場整備が本格化し平野部での発掘調査が進められた。

昭和60年(1985)ほ場整備に係る酒田市生石2遺跡の調査で、この地域ではめずらしい縄文時代から弥生時代中期にかけての土器が大量に出土した。亀ヶ岡文化の伝統と西日本の遠賀川様式の影響を受けた土器が出土したことで、庄内でも、弥生時代早くに稲作文化が始まっていたことを裏づけることになった。生石2遺跡での弥生時代に属する遺物の発見後、酒田周辺の平野部では縄文時代～弥生時代の資料について関心が高まった。平野部ではこれまでに第121図、表一35に示した遺跡から縄文土器や弥生土器が出土している。まとまった資料は生石2遺跡のみであるが、明らかに平野部にも遺跡が存在することは明白である。以前から東側丘陵上では縄文時代遺跡が存在することは知られており、1975年の山形県埋蔵文化財地図(山形県教育委員会)では8ヶ所の遺跡が確認されている。生石周辺では八幡町樋掛遺跡で、縄文時代後期中葉の土器片が出土している。また、酒田市熊野田遺跡では、縄文時代晩期の鉢が出土している。酒田市向田遺跡でも縄文時代晩期の土器や石鏃・石筥が出土した。ここは標高6～7mの地点である。梵天塚遺跡・中谷地遺跡でも弥生土器が出土し、平野部の広い範囲に分布が広がることがわかってきた。

庄内砂丘の形成史をまとめられた角田清美氏(1976角田清美「庄内平野の地形について」『庄内考古学13』)によれば、砂丘には3枚のクロスナ層が存在し、飛砂が少なく砂丘が発達しなかった安定した時期があると示された。この中でクロスナⅡ層は、酒田市黒森で縄文時代から平安時代の遺物が採集された層に相当する。クロスナⅡ層は、酒田市浜中付近で採集された資料を用いてC¹⁴年代測定がなされた結果、3,550±100年前(G a K-1235)の値が得られている。角田は砂丘での遺跡形成はクロスナⅡ層の安定期にあたりと示された。

以上、遺跡遺物の発見は、砂丘地帯・湿地帯・湖沼地帯にも縄文人が生活領域を持っていたことを物語る。庄内平野は古代以来開拓が進み、日本有数の水稻地帯になっている。地表は冠水状態になるため、シルト層はグライ化が見られ、耕地の改変により、平安時代の遺構は地表下30cmほどで確認できる。ところが中谷地遺跡では、表土下約80cmで弥生土器を検出した。梵天塚遺跡では、深く掘り込まれた溝跡から弥生土器が出土した。青灰色シルト層中以降に縄文時代から弥生時代の遺構が存在する可能性が高まった。